

(うん、たぶんそうだよねきっとそうだよね、そうに違いないよ)

自分に言い聞かせるように繰り返し思いつつ歩を進めていると、突然真横にバイクが止まった。

「あ、セルティさん。こ」

こんにちは、と言う前に闇色の影に捕らわれる。え、と思った瞬間には彼女にさらわれていた。

(えええええ??)

それは急いでいたが乱暴ではなく、だから痛みの類はない。だが驚いた。びっくりした。仰天した。

その間にバイクはどんどん走り、気がつけばセルティのマンション前に到着している。

(そういうえばバイクって二人乗り禁止だよな。きつと時速もオーバーしてたよね)

そんなことを今更が思うが、全てが遅い。たとえ走っている最中に気がついていてもどうにもならなかっただろう。

(白バイに見つからなくて良かった)

自分をさらったセルティのためにそう思いつつ、慌てた様子の彼女に促されるまま、マンションへと進む。突然誘拐まがいにつれてこられたが、彼女に悪意がないのはわかりきっている。用件も、この慌て方から大凡想像はついてた。

そうして部屋にとたどり着けば、そこには新羅と静雄がソファに座っていた。

(やっぱり)

「やあ帝人君」

にこにこ穏和な笑顔で告げる新羅と、ものすごく複雑そうな表情を浮かべる静雄に向かって頭を下げた。

「こんにちは、新羅さん、静雄さん」

「うんこんにちは。ああ、セルティお疲れさま。すごいね早かったねさすが僕のセルティだよ!」

『すぐに見つかって良かった』

そうして帝人もソファに座るようにと勧められ、言うとおりにする。何を言われるのかはもうわかっていた。

「あのさ、帝人君。趣味は千差万別とはいえ、悪いことは言わないから臨也はやめといった方がよいよ」

『そうだ帝人。臨也はやめとけ。臨也はダメだ。絶対ダメだやめておけ』

「あー、やっぱりよ、やめとけ」

口々に言われる内容は、結局のところ意味は同じだった。そして予想通りだった。

昨日、結果的に静雄は見逃してくれたが、臨也と帝人がつきあうことになった、という事実をセルティたちに伝えたのだろう。結果、三人で自分を制止している。限りなく善意だとわかっているのに、突然さらわれても怒る気は全くない。

(つていうか、本当に臨也さんでもものすごく信用がないんだなあ)

新羅と静雄は真顔だし、セルティも顔があればそうだろう。